

くりの新品種「東早生・秋月・大峰」の特性について

1 試験のねらい

くりの品種は、早生系のものが少なく優良な品種も少ないことから、新しい早生系統の品種として登録された東早生・秋月・大峰について検討を重ねてきた。その結果、一応の結論が得られたので、昭和55年から5か年間の成績をとりまとめて報告する。

2 特性概要

表-1、表-2に各品種の樹の特性及び果実について示した。

東早生は、樹勢が強いが枝の発生数が少なく、結果母枝当たりのきゅう果の着生数も丹沢や国見に比べて明らかに少ない。収穫期は、丹沢と国見の中間ごろに始まる品種で5か年間の平均でみると、始めが9月12日、盛りが9月15日、終りが9月19日で筑波の始まる前に収穫が終了する。クリタマバチの虫えいの被害程度は、丹沢程度で国見より多い。10年間の累積収量をみると、1樹当たり45.0kgと少ない方である。果実の外観は良好であるが、平均果重は、5か年間の平均で19.0gと中程度の大きさであり、LL以上の果実の割合も39.0%程度である。食味は良好であり、比重も1.06とクリ全体の中では重い方で丹沢の1.05より重い。双子果率7.6%、果頂裂果5.1%、座の裂果1.6%、虫害果率6.3%と下物の割合は少ない。

秋月は、東早生と非常によく類似した品種で樹勢が強く枝の発生量やきゅう果の着生が少ない。クリタマバチの虫えいの被害程度も丹沢程度で、東早生と同じ程度被害がみられる。収穫期は、東早生と同じかやや遅く始めが9月9日、盛りが9月16日、終りが9月20日であり国見より3日程度早く収穫される。収量についてみると、累積収量は東早生と同じように枝の数が少なく、着きゅう数も少ないことから、10年間で54.0kgと少ない方である。果実の大きさは、5年間の平均で19.3gと中クラスの大きさとLL以上の果実の割合も38.4%程度である。果実は、光沢があり代観が良く東早生より果皮色がやや濃い。食味、粒揃いとも良く、双子果率10.6%、果頂裂果3.1%、座の裂果1.9%、虫害果率7.7%と下物は全体的に少ない方である。

大峰は、昭和59年現在7年生の樹令であるが、樹勢が中程度で枝の発生量は丹沢や国見と同じ中程度である。きゅう果の着生も中程度で、クリタマバチの虫えいの被害程度も丹沢程度で実害はない。収穫期は国見より遅く筑波よりやや早い時期で、5年間の平均でみると始めが9月18日、盛りが9月23日、終りが9月27日である。収量は、7年間の累積収量が18.9kgと少ない方である。外観は良好であるが平均果重は15.1gと小さく、LL以上の果実の割合も13.6%にすぎない。粒揃いは良い方で比重も1.05と重い方であるが、食味は中程度である。下物は、双子果率が1.3%、果頂裂果が6.7%、座の裂果が0%、虫害果率が7.9%と少ない。

3 成果の要約

東早生・秋月・大峰の品種特性を検討した結果は次のとおりであった。東早生は樹勢強く食味は良いが、果実の大きさは中程度で収量が少ない。秋月は樹勢強く食味が良く、収量も丹沢程度

表-1 特 性

(昭和55年から5か年間の平均)

品 種	* 樹令	* 樹勢	枝の 発生	開花期(日)			収穫期			クリタマ バチの被 害程度	きゅう果 の 着生状況
				始	盛	終	始	盛	終		
東早生	10年生	強	少	6.10	6.15	6.22	9.9	9.15	9.19	±	少
秋 月	10年生	強	少	6.14	6.18	6.25	9.9	9.16	9.20	±	少
大 峰	7年生	中	中	6.14	6.18	6.25	9.18	9.23	9.27	±	中
丹 沢	19年生	中	中	6.16	6.20	6.29	9.1	9.7	9.14	+	中
国 見	13年生	中 やや弱	中	6.17	6.20	6.28	9.12	9.17	9.23	-~±	中

注 * 樹令は昭和59年現在

表-2 果 実

(昭和55年から5か年間の平均)

品 種	* 累積収 量 kg	平均 果重 g	LL 以上の 果実%	比 重	粒 揃	食 味	双子果 率 %	裂果%		虫害果 率 %
								果 頂	座	
東早生	45.0	19.0	39.0	1.06	良	良	7.6	5.1	1.6	6.3
秋 月	54.0	19.3	38.4	1.07	良	良	10.6	3.1	1.9	7.7
大 峰	18.9	15.1	13.6	1.05	良	中	1.3	6.7	0.0	7.9
丹 沢	21.6** 52.4***	20.6	50.8	1.05	良	中	5.6	21.7	0.0	5.9
国 見	24.2** 85.1***	22.4	63.5	1.04	良	中	4.0	3.4	0.0	4.7

注 * : 累積収量は、東早生・秋月が10年目、大峰が7年目の値。

** : 7年目の累積収量

***: 10年目の累積収量

であるが、LL以上の果実割合が丹沢より少ない。大峰は食味が中程度で、果実小さく収量が少ない。いずれの品種も大果生産のうえでは難点があると思われ、これらの品種を導入する場合は特性を充分考慮して検討することが重要である。

(担当者 田中敏夫* *現鹿沼農業改良普及所)